
ヴィレイサー談義 略して『ヴィレ談』

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィレイサー談義 略して『ヴィレ談』

【Nコード】

N2431Y

【作者名】

鮮血の刻印

【あらすじ】

駄文・極作者こと、鮮血の刻印の小説、『魔法少女リリカルなのはStrikers - JIHAD』の主人公であるヴィレイサーと、コラボでお世話になった数多くの女性陣との台本形式の談義。

カオス………とまではいかないけど、女性陣のヴィレイサーへの恋慕が強すぎたかなあと反省しています。 だけど後悔はしていないよ！（おい

あとがきに、質問要項があったりするので、答えて下さると助かります。

今の所、『リリカルなのは』のキャラは出てこない予定です。

1 回目 「参加者の皆様、ありがとうございます」（前書き）

鮮血

「と言う訳で、なんか知らないけど遂に連載しちゃう事になりました。」

ヴィレイサー

「いや、知らないだろ。」

お前の所為でこうなったんだからな!？」

鮮血

「いや、まさか質問して回答が来るとは思ってたから……………」
「」

ヴィレイサー

「活動報告内のとめておけばよかったのに……………」
「」

鮮血

「今更じゃん?」

ヴィレイサー

「まあ、な。」

鮮血

「それでは1回目、参りましょう!」

ヴィレイサー

「はあ……………」
「」

1回目 「参加者の皆様、ありがとうございます」

鮮血

「はい、と言う訳でやって参りました。

『ヴィレイサーにフラグを建築された女性陣によるヴィレイサー談義』！ 略して【ヴィレ談】！」

ヴィレイサー

「ダサッ!？」

ソフィア

「えゝ、そうですか？ とっても可愛いじゃないですかぁ」

レーネ

「どこがよ？（呆）」

アデル

「レーネの言う通りですね。 まったく可愛げのないタイトルです」

ソフィア

「可愛いですよ？ 『ヴィレたん』」

全員（ソフィアを除く）

「ヴィレ……たん？」

鮮血

「『ヴィレ談』と早口で言っていれば、その内『ヴィレたん』になるよ？」

ヴィレイサー

「確かに可能性はあるが……」

イリア

「ヴィレたん……ですか」

リリイ

「な、なんだか、和みます」

マリサ

「くふふ……し、新鮮、ねw」

ヴィレイサー

「笑うな！ つーか、俺が言った訳じゃないし、誰が好き好んでそんな呼び名を承諾するか！」

リリイ

「で、ですが、とても可愛らしいですし」

レーネ

「ま、まあ……アンタが『どうしても』って言うのなら、別に、呼んであげない事もないわよ？／＼／＼／＼／＼／」

ヴィレイサー

「……誰が頼むかよ、そんな事」

ミュゼット

「ヴィレたん……可愛い」

ソフィア

「そーですよー！ 素敵ですう」

ヴィレイサー

「ッ~~~~！ チッ……好きにしろ」

鮮血

「ツンデ（ry」

ヴィレイサー

「黙ってる」

ヴィレイサー談義 略して『ヴィレ談』

第1回 「参加者の皆様、ありがとうございます」

ヴィレイサー

「はあ、なんかもう、早くも疲れたな……………」

メイヤ

「ヴィレイサーさん、大丈夫ですか？」

ヴィレイサー

「ああ、まあ……………なんか、心配かけたようで悪いな」

メイヤ

「いえ……………貴方を好いているのですから、これくらいは『当然』です」

マリサ

「つまりそれは……………」

レーネ

「『当然の事をしていない私達はヴィレイサーの事を好いていない』
って言いたい訳？」

メイヤ

「そ、そんなつもりはありません!」

エルデ

「そんな事で潰し合いをしても無意味だろー」

ヴィレイサー

「…………俺が悪いとは言え、エルデの言う通り仲良くしてくれ」

エルデ

「ふむ…………よし、他の女と仲良くするから、今ここで私にキスしろ」

ヴィレイサー

「何でそうなる!?!」

エルデ

「理由などいらん。^{わけ}さー、やれ」

アデル

「いいえ、エルデ様。ここは私が彼とキスします」

エルデ

「ふん。ツンだかヤンだか定まらないお前が、私を差し置いてヴィレイサーとキスするなど、絶対にあってはならない」

アデル

「なっ!?! わ、私はツンデレでもヤンデレでもありません!」

エルデ

「どーだかなー。 まー、ツンデレはお前よりも適任がいるが（チラリ）」

レーネ

「な、何でそこで、みんなして一斉に私を見るのよ!？」

リリィ

「で、でも……」

イリア

「レーネさんがツンデレと言うのは、否定出来ませんし……」

ミュゼット

「……（無言で頷く）」

レーネ

「わ……………私はツンデレじゃなあ……………いつ!?!?!?!
／／／／／」

マリサ

「レーネ、落ち着いて」（ギョッ

レーネ

「マリサア……………（泣）」（ぎゅっ………）。

マリサ

「よしよし」（撫で撫で

むにゅ……………）。

ヴィレイサー

「いや、何でだよ!？」

エルデ

「分からののかー?」

ヴィレイサー

「分かってたら聞かねえから……………」

ミュゼット

「あの2人は……………大きいの、胸が」(ズビシッ！

ヴィレイサー

「そんな事で……………」。

と言うか、人を指差すな、ミュゼット」

ミュゼット

「ごめんなさい……………」

レーネ

「って言うか、『そんな事』という言葉で片付けていい事じゃないわよ！

何でこんな格差がある訳!？」

マリサ

「……………はあ……………」(ぐったり

ソフィア

「はふう……………」(同上

「メイヤはそう言いたい訳ですね……………」

メイヤ

「け、決して、そういう意味では……………」

エルデ

「『自分はこんなにも大きいから不便しない』と……………私達を嘲笑っているのか!？」

メイヤ

「ち、違……………! ひゃうんっ!？」

アデル

「まったく……………胸が大きいからとヴィレイサーを誘惑して……………!」

メイヤ

「ゆ、誘惑なんて……………私とヴィレイサーさんは、本気で愛し合っています! / / / / / / / / / /」

エルデ

「それは私とて同じだ!」

ヴィレイサー

「エルデ、お前の気持ちは分かっているから、メイヤを離してやれ」

エルデ

「だが……………」

ヴィレイサー

「俺が胸部の大きさで判断するはずがないだろ？」

エルデ

「むー……………いーだろー」

メイヤ

「ほっ……………」（安堵）

ヴィレイサー

「大事ないか、メイヤ？」

メイヤ

「あ、はい。　ヴィレイサーさん」

アデル

「私の前でイチャつかないでください（怒）」

ヴィレイサー

「別にイチャついてはいないのだが……………」

イリア

「やっぱり、ヴィレイサーには自覚が足りないというか……………」

リリイ

「ヴィレイサーさんにとってはイチャつきの部類に入らなくても、私達にとっては心苦しいものなんです」

ヴィレイサー

「うーん……………流石にこればかりは、どうしようもないというか……………」

「相変わらずだなあ……………」。

ちゃんと休息を取っているんだろうな？」

カローラ

「もちろんだ。心配性だねえ、お前さんは」

ヴァイレーサー

「心配にもなるさ。倒れられでもしたら困るから」

カローラ

「ふふっ……どうやら私は、一番愛されている様だね」

レーネ

「そんなの、不可視なんだからアンタが一番愛されているって事にはならないわよ！」

と言うか、ヴィレイサーの事よりも実験を優先するなんて……

「ああ、ヴィレイサー、また実験に付き合ってくれるかい？」……

「……って、人の話を聞きなさいよお！（怒）」

カローラ

「お嬢ちゃんには聞かせられない大人の話をしたいから、嬢ちゃん
はあっち行きな」

レーネ

「子供扱いするなああああ ああああ――――！！！！」

ヴェイサイ

「お、落ち着け、レーネ！」

レーネ

「むう……………」

カローラ

「ふ〜ん？ ヴィレイサーの言う事を素直に聞くという事は、相当惚れこんでいるのかい？」

レーネ

「べ、べべ別に！？／＼／＼／＼／＼／」（ぷいっ

カローラ

「素直じゃないねえ……………」

それで？ あっちの御二人さんはいつまで揉めているんだい？」

ヴィレイサー

「俺に聞くなよ……………」

エルデ

「よし。それなら、どっちが先にヴィレイサーにキスをしてもらえるか、勝負しよーじゃないか」

アデル

「いいでしょう。受けて立ちます！」

ヴィレイサー

「はぁ……………」

マリサ

「……………」

ヴィレイサー

「ん、どうした、マリサ？」

マリサ

「いえ、別に。なんでもないわ。

ただ……」

ヴィレイサー

「た……んっ！？」（キスされた

マリサ

「ん……」（キスした

全員

「……！？」「……」

マリサ

「ただ、『どうしてヴィレイサーからしてもらったのを待っているのかしら？』……と、思っただけよ（嬌然」

ヴィレイサー

「さいですか……／＼／＼／＼／」

マリサ

「ふふ、照れちゃって……可愛いわね」

全員

「……ヴィレイサー（さん）！」「……」

ヴィレイサー

「な、何で俺が怒られなきゃならないんだ……っ！」「」

?
?
?

「……………って、何で私の出番がないんですか——!?」

1 回目 「参加者の皆様、ありがとうございます」（後書き）

鮮血

「とりあえず一言言いたいんだけど。」

ヴィレイサー

「ん？」

鮮血

「これってやっぱりカオスと言う部類になるのかな？」

ヴィレイサー

「知らん。」

鮮血

「だよねー。」

参加者一覧

・エルデ（ムーギネーター先生 著、『魔法少女リリカルなのはStrikers 〜禁断の刃〜』）

・アデル＝クリーシア（ムーギネーター先生 著、『魔法少女リリカルなのはStrikers 〜禁断の刃〜』）

・ミュゼット＝アルカデイス（ムーギネーター先生 作のオリキヤラ）

・カローラ＝リバティ（イツキ先生 著、『魔法少女リリカルなのはStrikers 護るための力を持つ者』）

・メイヤ「クロウフィールド（イツキ先生 著、『魔法少女リリカルなのは』夜天を射る弓）」

・レーネ（神崎はやて先生 著、『魔法少女リリカルなのは』Strikers 氷翼の天使）」

・イリア（神崎はやて先生 著、『魔法少女リリカルなのは』Strikers 氷翼の天使）」

・リリイ（神崎はやて先生 著、『魔法少女リリカルなのは』Strikers 氷翼の天使）」

・ソフィア「ジュリストン（神崎はやて先生 著、『新魔法戦記リリカルAngels 神のルール of Gods）」

・マリサ「ネティラス（神崎はやて先生 著、『新魔法戦記リリカルAngels 神のルール of Gods）」

・クレア（マグネス先生 著、『魔法少女リリカルなのは』Strikers 罪を背負いし墮天の翼）」

・ノア（カガヤ先生 著、『リリカルなのは』異伝X DESTINY 第？部 輝光戦記）」

鮮血

「以上の方々です。」

ヴィレイサー

「男性陣は？」

鮮血

「その内出すよ。」

そんなに遅くならない予定ですので、しばし御辛抱を。」

ヴィレイサー

「やれやれ……………」

鮮血

「愛慾は底なしなのに、疲れてんの？」

ヴィレイサー

「当たり前だ！」

鮮血

「とりあえず、こないだから行っている質問をば。」

女性陣限定

『ヴィレイサーに言ってもらいたい言葉をあげてください』

女性、男性、両陣営

『ヴィレイサーにしてももらいたい事をあげてください』

鮮血

「と、なっております。」

ヴィレイサー

「レーネは俺に何をさせる気なんだか……………」

鮮血

「いつその事、両方でいいじゃない？」

ヴィレイサー

「は？」

鮮血

「だって、質問を良く見てみなよ。

僕、“１つだけあげる”なんて書いてないもんｗｗｗｗ
つまり……………」

ヴィレイサー

「ふ、複数でも可……………と言いたいのか……………」

鮮血

「ピンポンw」

ヴィレイサー

「貴様あ！」

鮮血

「では、質問の回答はメッセージか感想でお願いします。
次回もお楽しみに。」

2回目 「『優柔不断』って、なんだかい響きだと思う」 (前書き)

鮮血

「2回目からは、僕が即興で考えた『前回までのあらすじ』なるものを加えようかと思います。」

ヴィレイサー

「絶対に面倒な事になるだろ……………」

鮮血

「まあ、ね。」

では、どうぞー。」

2回目 「『優柔不断』って、なんだかいい響きだと思う」

鮮血

「前回までのあらすじ」

—あらすじ—

遂に始まった『ヴィレイサー談義』、略して『ヴィレ談』。

少女達の、血を血で洗う泥沼の愛憎劇は、激化していく。

アデル

「ふざけないで、この泥棒猫！」

レーネ

「泥棒？ あゝら、私が貴方から何を盗んだって言うの？w」

アデル

「ヴィレイサーよ！ 返して、私の……………」

レーネ

「“私の”ヴィレイサーよ。 貴方なんかのじゃないのよ！」

アデル

「そ、そんな……………」

レーネ

「いい事教えてあげる♪ ヴィレイサーはね…………アンタとはお遊びだったのよお！」

アデル

「!？」

鮮血

「レーネから突きつけられた真実に、アデルは衝動的に包丁を手にとった！」

アデル

「ヴィレイサー……………！」

鮮血

「そして……………」

ザクッ！

鮮血

「ぐふう……………な、何で僕が刺されんの？」

アデル

「下らない台本を書くからです」

鮮血

「アデルさんのヤンデレは、あながち間違いじゃな（惨殺）」

アデル

「だ・ま・り・な・さ・い！」

ヴィレイサー

「はあ……………」

レーネ

「〜」

ヴィレイサー

「ご機嫌だな」

レーネ

「そりゃあそうよ、アンタが私を選んだんだもの」

アデル

「所詮は台本の話です。その程度で大喜びすると言っのなら、己

の妄想を抱いたまま溺死しなさい」

レーネ

「何、アーチャ。ネタに走ってんのよ……………」

鮮血

「ちなみにこの後、レーネも遊びだったと言う事が発覚する予定だったw」

レーネ

「ロギアス…………「ちよっ!？ ま、待つt」…………デストロイヤー
—————!」

鮮血

「ギアアアアアアアア————!?!」

レーネ

「まったく……………」

ヴィレイサー

「そう怒るなって、レーネ」

レーネ

「だ、だってえ（涙目）」

ヴィレイサー

「たかだか台本の内容だろ？」

レーネ

「でも……………本当にヴィレイサーが離れちゃったら……………って思うと

「……………」

ヴィレイサー

「俺はお前を離したりしないよ」(ぎゅっ)

レーネ

「ヴィレイサー……………」(泣)「(ぎゅっ……………」

アデル

「ジー……………」(怒)「

クレア

「むう……………」

ヴィレイサー

「あ、あと……………アデルも、クレアも……………」

レーネ

「返せ！ アンタの事をカッコイイと思った私の青春を返せ——
！——」

ヴィレイサー談義 略して『ヴィレ談』

第2回 「『優柔不断』って、なんだかい響きだと思う」

鮮血

「……………と言う訳で、ヴィレイサーの優柔不断な一面が明るみに出たよ！ 第2回の始まり」

ヴィレイサー

「初っ端から酷い目に遭った……………」

リリイ

「だ、大丈夫ですか？（汗）」

ヴィレイサー

「まあ、な。 だけど、これがしばらく続くかと思うと……………」
「ヴィレイサーさー！ーん！」……………おわっ！？」

ノア

「ギョウッ」

ヴィレイサー

「ノ、ノア!？」

イリア

「あの………どなたでしょうか?」

鮮血

「前回のオチ担当」

ノア

「よくもあんな扱いにしてくれましたね!？」

鮮血

「ごめん。加えられそうもなかったから、あんな形になった。もちろん、カガヤ先生の許可は取ったけど」

ノア

「今度やったら、OHANASHIしますからね?」

鮮血

「はい………(汗)」

ノア

「前回で遅れた分、ヴィレイサーさんとイチヤイチヤさせてもらいますね」

鮮血

「それはどうなるか分からん(惨殺)」

ヴィレイサー

「……………（汗）」

ノア

「それじゃあ、まずは何をしますか？」

ヴィレイサー

「何って言われてもなあ……………特に決まっていんだよな」

ソフィア

「あの……………ノアさんって、ユニゾンデバイスですか？」

ノア

「そうですよ？」

ソフィア

「……………手広いですよね、ヴィレイサーさん」

エルデ

「そーだなー」

カローラ

「年上は……………私くらいかねえ？」

クレア

「その内、敵にも立てそう」

ヴィレイサー

「そ、それは……………俺には『無い』と断言できん（汗）」

そもそも、作者が『可愛い』と思った相手にフラグを立てている訳だからな」

ミュゼット

「……じゃあ、ヴィレイサーは可愛いと思ってないの？」

ヴィレイサー

「いや、そんな事はねえよ？ みんな『可愛い』って思ってる」

鮮血

「話を戻すけど、今後敵キャラに立てる可能性は高いよ？」

全員

「……！？」

鮮血

「神崎はやて先生のとこのアルテミスさんと結婚ボタンでコラボしたじゃんwww」

リリイ

「で、でも、その後にどなたかにフラグが立つ可能性は……」

鮮血

「出来れば、神崎はやて先生の所のキャラを制覇したいなあ……とか考えてる」

イリア・リリイ・ソフィア・レーネ・マリサ

「……制覇なくていい（です）！！」「……」

鮮血

「やっぱり？」

「じゃあ、イツキ先生の所を制覇しよう！」

メイヤ・カローラ

「「どうしてそうなるんだ（ですか）！」」

エルデ

「私達の所は安泰だなー」

アデル

「そうですね」

ミュゼット

「……良かった」

クレア

「私は、ヴィレイサーを独り占めできる」

ヴィレイサー

「まあ、大半はツバサに好意を持っているからな」

ノア

「このままだと敵さんにもフラグが……」。

でも、落としている割には『僕っ娘』とかいませんよね？」

鮮血

「リースが僕っ娘だったら、初期の頃に落としていた事になるけどねw」

ヴィレイサー

「そつえば、離別したのってアイツだけだったな」

鮮血

「そうだね。まあ、今後の人で離別エンドはやらないと思うけど」

レーネ

「そう考えると、なんか不憫ね……………」

ヴィレイサー

「これから先、離別をやるとしたら……………多分、フェイトぐらいじゃないか？」

鮮血

「そうだね。」

まあ、正しく言えば『離別』じゃなくて『死別』だけだね」

リリイ

「ヴィレイサーさんのお話も少ない上に、死別が確定しているんですか……………（汗）」

イリア

「不憫な気がしてなりませんね……………」

鮮血

「そう？　僕はそこまで感じないけど」

メイヤ

「せっかく、ヒロインになっている訳ですし……………」

鮮血

「ヒロインに決まったからって、必ず恋が成就する訳じゃないですよ。」

それに、『リリカル Angels』の方でもフェイトの立ち位置、危ういよね?」

ソフィア

「そ、そういえば……………」

ヴィレイサー

「このままだと、間違いなくソフィアルートに一直線だよ……………」

鮮血

「まあ、他作品がどう転がるかは分からないし、ここでとやかく物申しても迷惑なだけだから、フェイトに関してのお話は終わり。

で、離別の話に戻すけど……………可能性としては、ヴィレイサーと敵対していればそういう展開もあり得るから、もしかしたら誰かの中であるかもよ?w」

ヴィレイサー

「ねえよ」

鮮血

「断言しないで!?!」

ヴィレイサー

「なら聞くが、そういう展開になりそうな奴はいるのか?」

鮮血

「……………アルテミスさん?」

ノア

「確かに、『リリカル Angels』に合わせると、今は敵対して

いますけど……」

鮮血

「敵対しながらも、相思相愛ってなんかいいじゃん！（握りこぶし）」

ヴィレイサー

「お前の趣味かよ！」

鮮血

「まあ、これも今後の展開に左右されるから、とりあえず保留」

イリア

「しかし、ヴィレイサーは本当にいろんな女性に手を出していますよね……」

ヴィレイサー

「俺じゃなくて、作者が勝手にやっているんだけどな（落胆）」

アデル

「だから貴方は浮気者と称されるんです」

ヴィレイサー

「はぁ……俺も一筋だと豪語出来ればいいんだが、今はそうもいかないからな」

鮮血

「節操なしだなあ、まったくWWW」

ヴィレイサー

「主にお前の所為だからな!？」

鮮血

「まあまあ、別に不評を買っている訳じゃないんだから」

ヴィレイサー

「ちくしょう……」

メイヤ

「でも、その……やはり、ヴィレイサーさんとは極力2人きりがいいですね」

カローラ

「同感だね」

鮮血

「IFは個別だから。」

それに、この中じゃあメイヤさんが一番、ヴィレイサーと深い関係になるまでの話が多いと思う」

メイヤ

「ええ！？／／／／／／／／」

レーネ

「ちよっ！？ それ、どういう事！？」

鮮血

「言った通りだよ？」

クレア

「聞いてない」

鮮血

「今言ったからね」

イリア

「どんなお話を書くんですか？」

鮮血

「結婚と、メイヤさんの両親に報告する話」

リリイ

「な、何故メイヤさんなのですか？」

鮮血

「結婚はともかく、両親への報告は他に適任者がいないでしょ」

エルデ

「そー言われるとそーだな」

鮮血

「後はマリサさんぐらいだけど……」（チラリ

マリサ

「何かしら？」

鮮血

「まあ、マリサさんは結構大人だからね。

メイヤさんみたく、話を広げられそうもない」

マリサ

「釈然としないわね……………」

ソフィア

「メイヤさん、羨ましいですう……………」

ノア

「ヴィレイサーさんとマスターの『殴り愛』はどうなったんですかあ!？」

鮮血

「『殴り合い』ね? (汗) まあ、今は分からない」

ノア

「ぶうぶう……………」

鮮血

「可愛いブ。サギになっちゃうよ?」

ノア

「可愛いのは認めますが、。ウサギにはなりません!」

レーネ

「ブウサ。なんて、可愛くないと思うけど……………」

ソフィア

「え? とっても可愛いじゃないですかあ」

イリア

「私は、ラードがいいですね」

リリイ

「私も同感です。 小さいラピー。も可愛いです」

メイヤ

「私は……チーグ。です。 カローラさんは？」

カローラ

「ト。ナガかねえ？」

クレア

「……小さいヴィレイサーが一番可愛い」

ヴィレイサー

「そこで俺を引き合いに出すなよ!？」

アデル

「小さい、ヴィレイサー……」(鼻血

ミュゼット

「……GJ!」

エルデ

「まっただなー」

ヴィレイサー

「俺にとっちゃあ嬉しくねえよ……」。

「言うつかアデル、早く鼻血を拭け(汗)」

エルデ

「何故だ? 皆に好かれて嬉しくないのか?」

ヴィレイサー

「そういう訳じゃないけど……小さい俺の方が良かったのかなあ
と」

エルデ

「確かに小さいお前は可愛いが、今のお前はカッコイイじゃないか」

アデル

「エルデ様の言う通りです。

小さい方がいいのなら、ここにはいませんよ」

ヴィレイサー

「そりゃどうも／＼／＼／＼／＼」（そっぽ向きながら）

ソフィア

「ヴィレイサーさん、照れてます」

ヴィレイサー

「照れてねえ！」

マリサ

「ふーん、照れているのね。可愛いじゃない」

ヴィレイサー

「だから、照れてねえって言ってるだろうが！」

マリサ

「そっやってっつけんどんにならないで、少しは素直な方が可愛げがあるわよ？」

ヴィレイサー

「くっ……………」

鮮血

「君って、絶対に尻に敷かれるタイプだね」

ヴィレイサー

「んな分析はいらん！」

鮮血

「しかも頭が上がらないときたもんだw」

ヴィレイサー

「否定できん……………」

鮮血

「ダメだよ、女性に苦勞かけちゃ」

メイヤ

「私は、ヴィレイサーさんを支える事が苦勞とは思いませんよ？」

ヴィレイサー

「メイヤ……………」

メイヤ

「ヴィレイサーさんに尽くす事を苦と考えたりしません。

私は、ヴィレイサーさんと共に居るだけでも幸せですから」

鮮血

「見返りは求めません。私に、貴方を支えさせてください」

ヴィレイサー

「……………ああ、叶えるよ、必ず」

メイヤ

「はい、ヴィレイサーさん」

鮮血

「……………終わった？」

ヴィレイサー・メイヤ

「「！？」」

鮮血

「周囲に人がいるのに、よくもまあ、イチャイチャしたね？」

ヴィレイサー

「別に悪い事ではないと思うが？」

鮮血

「十分に悪いからね！？」

メイヤ

「わ、私だけ、すみません（汗）」

クレア

「私も、ヴィレイサーにあんな事言われたい」

ミュゼット

「……（コクコク）」

ノア

「せっかく『ずっと私のターン』予定だったのに！（泣）」

ヴィレイサー

「メイヤ以外に言わない訳じゃないんだし、我慢してくれ」

エルデ

「言うだけなら大した苦労にもならんだろー」

アデル

「エルデ様の仰る通りです」

カローラ

「私も同感だね。」

ソフィアお嬢ちゃんたちは？」

ソフィア

「私は……いっぱいぎゅってしてくれたら、それでいいです」（悦）

「

レーネ

「あ、アンタねえ……………」

マリサ

「まあでも、一理あるわね。」

言葉よりも行動……………わかりやすくていいわ」

リリィ

「普段のIFで、充分過ぎるほど言葉はかけてくださいますしね」

イリア

「時々恥ずかしくはありますが……………／／／／／」

レーネ

「まあ、変に着飾るよりいいんじゃない？

むふふ、今度はどんなことしてもらおうかなー（ニヤ）」

マリサ

「……………レーネが言うと、DSな方にオートで脳内補正されるから怖いわね」

ソフィア

「ど、同感です……………（汗）」

アデル

「苛められるヴィレイサーも中々だと思えますよ？w」

レーネ

「分かってるじゃない。

時折見せるあの我慢している時の顔……………もう堪えないっ」

エルデ

「で、やり返されるのがオチか」

ノア

「そういえば、結局御二人ともヴィレイサーさんに苛められちゃいましたよねw」

2回目 「『優柔不断』って、なんだかい響きだと思う」(後書き)

鮮血

「何だ、出だしのドロドロな愛憎劇はwww」

ヴィレイサー

「いや、お前のせいだろうが……………」

鮮血

「まあ、色々と僕も暴露しちゃったけど。
その分、はっちゃけましたw」

ヴィレイサー

「そして俺が理不尽に怒られる、と…………orz」

鮮血

「って言うか、メイヤさんに対してどんだけなのさw」

ヴィレイサー

「どんだけと言われても…………『本気だ』としか言いようがない」

鮮血

「ああ、そうですか……………」

さて、次回は男性陣サイドに参りたいと思います！

ヴィレイサー

「まだまともに質問に答えて無いのかよ……………」

鮮血

「いつまでも女性陣だけじゃあ、男性陣の皆様が悪いしね。
では、次回もお楽しみにー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2431y/>

ヴィレイサー談義 略して『ヴィレ談』

2011年11月17日10時44分発行